

12. 小児白血病のターミナル・ケア (2)

— 患児の死の不安 —

木部則雄^{*1}, 細谷亮太^{*1}, 西村昂三^{*1}

I. はじめに

小児白血病は、近年寛解率の向上、長期生存者の増加を呈し注目を引いている。しかし、未だに小児の死因としては、上位を占め、死を避けることのできない患児が多数存在し、ターミナル・ケアを必要とする事の多い疾患である。

しかし、我国では、小児のターミナル・ケアに対し、実地・臨床上の配慮が充分でないと考えられるため、前回本研究班において「小児白血病のターミナル・ケア」について報告した。

今回は、前回の続報として、同様のアンケート用紙に質問事項を加えて調査した。

我々は、本報告において、11項目の質問内容(表2参照)のうち「死」についての項目を選び、小児白血病患児を中心とした患児の死の不安の検討を行なった。

ターミナル時に、患児が死をいかに考え、どの程度の死の不安を持っているのか、どのように死の不安を表現するのかについて、我々、医療スタッフが認識する事は、患児の行動、表現を理解し、ケアを行なっていく上で、有意義な役目を果たすと思われた。具体的には、1) 患児の死の不安の年齢別変遷、2) 疾患別患児の死の不安について報告する。

II. アンケート方法、集計

アンケート対象者は、昨年より本年9月までに当院で死亡した小児白血病患児を中心とした患児の家族である。調査方法は、あらかじめ電話で、

アンケート主旨・内容を説明し、承諾の得られた家族に、アンケート用紙を送り、記載していただいた。

第1報では、82年までの31家族のアンケートの回収を得ていた。

今回は、あらたに19例をアンケート対象とし、回収率13/19, 68%であった。

両アンケート回収家族の患児の疾患内容、性別、死亡時年齢、年齢分布は、表1に示してある。

アンケート内容は、表2に示すごとく、11項目の質問から構成されている。

III. 結果ならびに考察

アンケート結果より、「死の不安を示した患児群」と「死の不安を示さなかった患児群」の2群に分類した。「死の不安を示した患児群」には、「死にたくない」「僕は死ぬんだ」をはじめとして、明瞭に死という言葉を使用して、死の不安を表現した患児と、「もう治らないの」をはじめとして、抽象的な表現で死の不安を表現した患児が含まれている。

1) 表3は、第1報、今回の患児の死の不安に関するアンケート結果を示している。

4歳未満の患児では、死の不安を言葉に出した患児はいない。しかし、表には示されていないが、きわめて漠然とした事、例えば突然の号泣、患児の描いた絵などで、患児が、本能的に死に対して不安を持っているのではないかと、数名の両親が感じていた。

11歳以上の患児では、死に対する不安を全例で表現していた(ダウン症児1例を除く)。質的な詳細についてはわからないが、頻度的には、成人

* 1 聖路加国際病院小児科

表1 アンケート対象疾患, 内容分布

	～1982	1983～1984 Aug.
対象疾患		
白血病	21例	9例
神経芽腫	7例	1例
骨肉腫	1例	2例
脳腫瘍	1例	1例
ウィルムス腫瘍	1例	0例
性別		
男児	17例	5例
女児	14例	8例
死亡時年齢	10か月～17歳 (中央値 6歳)	2歳3か月～15歳11か月 (中央値 8歳)
年齢分布		
0～3歳	5例	1例
3～6歳	8例	2例
6～10歳	11例	6例
10歳～	7例	4例

表2 アンケート内容

1. 患児が病名を知っていたか？。
2. 再発時, 治療効果がなかった時の感想について。
3. ターミナル時ショックだった事, 悲しかった事, 苦しかった事について。
4. 患児をいつ駄目と思ったか？。
5. 医師, 看護婦の改善すべき点, 好ましかった点について。
6. 経過中の血液供血者の確保, 経済的なことについて。
7. 民間療法の有無について。
8. 「死」について。
9. 病理解剖について。
10. 患児死後の家族内の変化について。
11. 「宗教」について。

と変わらないものと思われた。また, この年齢は思春期にあたり, 数名の患児は遂に死という言葉を言わず, 抽象的に死に対する不安を表現している事も注目され, ケアを行なう上で充分考慮していく必要があると考えられた。

「死の不安を示した患児」と「死の不安を示さなかった患児」の分布が混在しているのは, 4歳以上11歳未満であった。

この年齢層の検討可能な症例数は22例, 死の不安を示した患児は14例, 死の不安を示さなかった

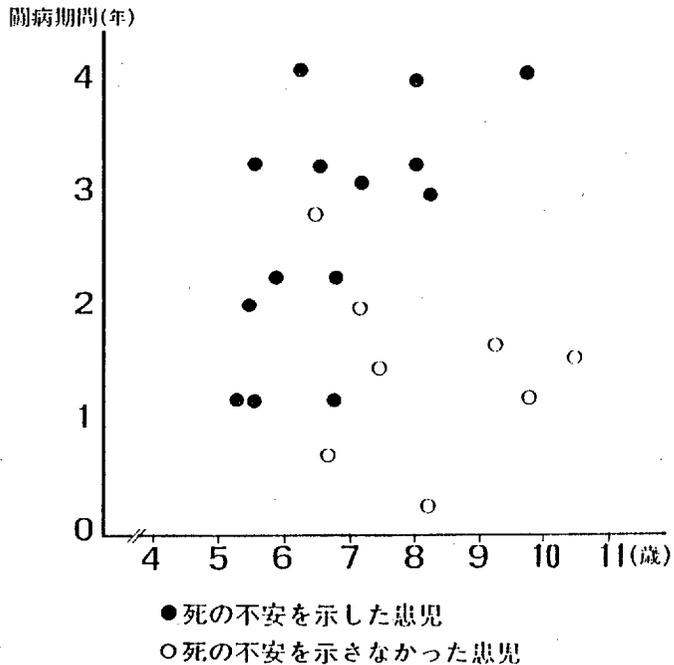
表3 「死」について

お子様は経過中「死」の恐怖を何らかの形で表現なさいましたか？

		した		単語としての死	
0～4歳	I	6例	0	0	0
	II	2例	0	0	0
4～7歳	I	10例	9	6	6
	II	3例	3	3	3
7～11歳	I	9例	5	1	1
	II	5例	2	2	2
11歳～	I	6例	6	2	2
	II	3例	2	2	2

(I ～1982, II 1983～1984 Aug.)

図1 闘病期間と年齢



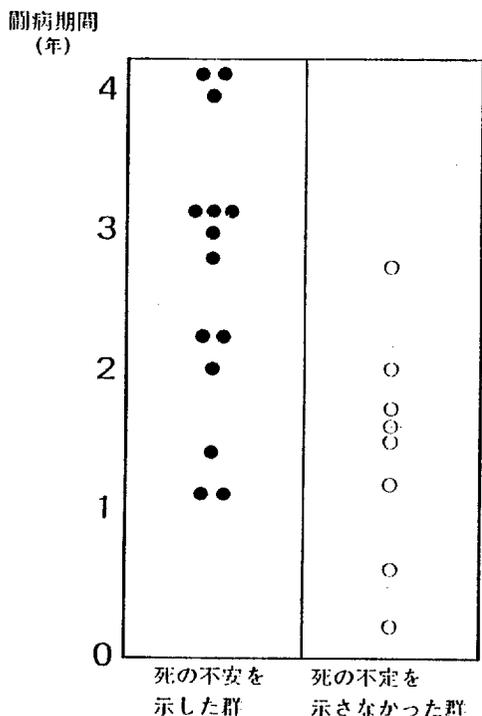
患児は8例である。

図1の横軸は死亡時年齢を示し、縦軸は闘病期間を示している。黒丸は、死の不安を示した患児、白丸は、死の不安を示さなかった患児を示している。グラフからみて横軸の年齢と死の不安に、明瞭な相関関係は認められていない。しかし、縦軸の闘病期間との関係では、経過が長くなるにつれて年齢に関係なく、死の不安を示す患児の頻度の増加が認められた。特に発病後2年を経過した症

例では、1例を除き、すべての患児で死の不安を認めた。

図2は「死の不安を示した群」「死の不安を示さなかった群」に、各患児の闘病期間をプロットしたものである。平均闘病期間は、「死の不安を示した群」で2年9ヶ月間、「死の不安を示さなかった群」で1年6ヶ月間で、1年3ヶ月の差が認められ、統計学的に $0.02 < P < 0.01$ と有意な差が認められた。上記に示したごとく、当院での4

図2 死の不安と闘病期間



歳以上11歳未満の範囲での、患児の死の不安は、死亡時の年齢に関係するより、闘病期間に関係しているのではないかと考えられた。

これは、闘病期間が長期間におよぶことにより、入院・通院・様々な苦痛を伴う医療処置・同病の友達との別離などを経験することで、死を身近かなものと感じ、自分の身にもふりかかってくるのではないかという不安にかられる状況に追い込まれるのではないかと考えられた。

2) 死の不安について、4歳以上11歳未満の範囲で、白血病と神経芽腫とで比較検討を試みた。両疾患の闘病期間に有意差は認められなかったが、死という言葉を使い、明瞭に死の不安を表現した患児は、白血病で6/13、43%、神経芽腫で5/7、71%であった。また、5歳以下の患児で、上記のごとく死の不安を示した患児は4例で、そのうち3例が神経芽腫であった。

症例数が少なく、統計学的裏付けも不能ではあるが、神経芽腫患児の方が、白血病患児より、死の不安を示す頻度、質ともに高いのではないかと

いう印象を受けた。

神経芽腫は、白血病に比し眼球突出などのセルフ・イメージの破壊を伴うことが多く、治療に抵抗性を持ち、そのため強力な化学療法を必要とし、その結果、敗血症などの致命的な合併症を経験する事が多い疾患である。そのため、闘病生活自体が、神経芽腫では白血病より苛酷なものとなる事が多い。

これは、闘病期間のみでなく、苦痛の多い闘病経験が、大きく関係しているものと思われた。

本研究に際し、感じた事を述べると、両親からのアンケート調査では、完全に患児の死に対する認識を把握することは困難なことと思われた。

しかし、我々のアンケート調査では、4～5歳の患児でも、明瞭に死に対し不安を持つ患児もあり、そうした問題についての精神的ケアも必要となってきたのではないかと思われた。

具体的には、個々のケースで、様々なパターンがあるため、両親・医療スタッフとの密な話し合いにより、患児の不安を減じるための最善の策を講ずるのが良いように思える。

また、ターミナル・ケアの検討・実践は、未だ充分行なわれているとはいえず、多くの問題を抱えているが、幼児・学童に対してのデス・エデュケーションの必要性なども、今後検討を要する問題と思われた。

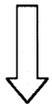
IV. 結 論

小児白血病を中心とした患児の死の不安。

4歳未満：死の不安を「死」という言葉を使用して表現することはなかった。両親の中には、患児の態度の変化などで、患児の死の不安を感じたと述べた者があった。

4歳以上～11歳未満：多くの医療行為、同病の友達との別離などを経験するにつれて死の不安は増大してくる。闘病期間が長くなれば、それだけ多くの経験を積み、また、神経芽腫患児は白血病患児に比し、質的に辛い経験が多く、死の不安は増大してくる。

11歳以後：死の不安は成人と差がないと思われ、「死」という言葉避ける傾向が認められた。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1.はじめに

小児白血病は、近年寛解率の向上、長期生存者の増加を呈し注目を引いている。しかし、未だに小児の死因としては、上位を占め、死を避けることのできない患児が多数存在し、ターミナル・ケアを必要とすることの多い疾患である。

しかし、我国では、小児のターミナル・ケアに対し、実地・臨床上の配慮が充分でないと考えられるため、前回本研究班において「小児白血病のターミナル・ケア」について報告した。

今回は、前回の続報として、同様のアンケート用紙に質問事項を加えて調査した。

我々は、本報告において、11項目の質問内容(表2参照)のうち「死」についての項目を選び、小児白血病患児を中心とした患児の死の不安の検討を行なった。

ターミナル時に、患児が死をいかに考え、どの程度の死の不安を持っているのか、どのように死の不安を表現するのかについて、我々、医療スタッフが認識する事は、患児の行動、表現を理解し、ケアを行なっていく上で、有意義な役目を果たすと思われた。具体的には、1)患児の死の不安の年齢別変遷、2)疾患別患児の死の不安について報告する。